

◆【海員随想】職人芸天気図老兵去り 30 年 伏見貞男

1995 年 6 月、朝日新聞の「消える”職人芸天気図”」の記事に「手書きの天気図」うんぬんとある。自分の歩んだ道をふり返り、今更ながら感心している。

私が初めて船に乗ったのは昭和 19 年だった。輸送船に通信士として乗り組んだが、戦中とあって気象通報は軍の機密事項で、船でも天気図はなかった。各船独自の気圧計や晴雨計で、その日の天気を判断するのだった。

終戦になって気象通報も万国共通の無線通報を受信して、天気図を書くようになった。習ったわけでもないが、数字電報を天気図（ウェザーチャート）に書き込んだ。作業は 2 時間もかかった。等圧線や等温線を自由に書き込むまでには、なかなかできなかったものだった。

若い通信士に「天気図 3 0 0 0 枚」と言ってきた。3 0 0 0 枚書かないと一人前でないと。

数字で送られてくるモールスを、地点番号により直接天気図上に記号に変えて、風向、風力、気温などを書き込むのだった。今考えても職人芸だったとつくづく思う。

インマルサットが地球を回るようになって、これでわれわれの仕事も終わりだと下船した。

あれから 3 0 年、アメダス通報ができて天気図は手書きだったのか……と、6 8 歳の老兵が、昔をふり返っている。

「海員だより」